

筑波大学日本文学会会報

第16号

1992年2月

平岡先生を送る……………桑原博史……………	一
北関東平野の一隅で……………平岡敏夫……………	二
日本文学会だより……………	三
研究室だより……………	五
教官新刊紹介……………	九
卒業生だより……………	十
日本文学会教官学生名簿……………	十五

平岡先生を送る

桑原博史

今から三五年前、昭和三十一年四月に東京教育大学大学院に同時に入學したが、平岡先生と私との初対面であった。先生が二六歳、私が二二歳の春のことである。かすりの着物を着て大泉学園前の下宿におられたこと、いっしょに雑司ヶ谷墓地に漱石の墓を見に行ったこと、コンパで奥さんの名前を言わせたことなど、思い出は数多くある。縁あって筑波大学で御一緒するようになってからさえ一五年の歳月が過ぎた。

天性前向きで正直な先生が、はたで見ている私の目には、このところ長年の苦勞で相当に疲れているように見えたので、今回の転出は、先生にとって非常によかったと思っっている。もとより研究にもひたむきで、一回りも二回りも大きくなって大学の名を高めて下さった。その恩恵も、あとに残る者として感謝申しあげたいことである。

ただ急なことで、積み残して行かざるを得ない一、二のことが、先生にとっても心残りであろうと思う。谷脇・奥野先生の場合には、ほぼ完結なさっての転出だったが、先生の學問と人格を慕って集まった大学院生を中心とする学生は数多く、衝撃を受けたと思う。ぜひ御記憶にとどめていただきたいと思う。

私事であるが、私は隠者文学を研究の一つにしているので、どうしても俗事がおっくうである。すでに、平岡先生が去られたあとは、若い先生がたにすべてお願いして、了解していただいている。その点何の役にも立たない人間であるが、平岡先生が新しい天地で飛躍されることを祈念する気持ちは人の二倍である。どうぞ、おすこやかで夢を果たされるように。

北関東平野の一隅で

平岡敏夫

定年一年前に筑波を去ることになった。来年三月末で二期四年間つとめた文芸・言語研究科長職から解放されたら、かねて要請のあったアメリカの大学院へ半年ほど講義に行こうと再度の渡米の夢があった。留学生をふくめた院生の上級生は何年もの研究でもう一本立ちできるし、下級生は入学のときから私と課程修了までいっしょにやって行けるとはもともと考えられなかったのだから、という気持ちもあったが、アメリカにいて留守にせよ教授として在籍しているのとそうでないのとはやはり大きなちがいだらう。熱心な懇請を受けて止むなく候補者のひとりとして名前を出すことを承諾したのだが、いざれ様子を見て思案する余地はじゅうぶんあると思っていた。それが結局対立候補出ず、信任の運びとなったとき、定年前の一年間という時間について、さまざまなレヴェルで考えてみるよりほかはなかった。そして結局は後事を在籍の先生方に托して去ることになってしまった。

十二月五日に発表され、翌日地元新聞を中心に大きく報道されたのちも、私のアンビヴァレントな気持ちはつづいている。上級の院生諸君の力はじゅうぶんついており、一年という歳月でどうこうなるものではないが、たった一年、されど一年である。学問研究に期限はないことを当然の前提として今後ともおたがいに勉強をつづけて行くほかはないのである。

関東平野として大きく見渡すと、私は東海大学・横浜国大・筑波大といわゆる関八州をまわっていた。筑波が十六年ともしっかり長かったが、今度うつるのも群馬、北関東である。都内、山手線の内側の大学からも数年前からいくつか話はあったが、研究科長職でもあり、動けるような状態ではなかった。しかし、今思うと私には関八州が向いているのかも知れない——頂点的・稜線的文学史を、周辺・底辺から照射しなおすという仕事。中央的・名門的安泰よりも、むしろ地方的・新興的激動の方が、私の出自・経歴・学問に合っている

のはたしかなようだ。

迷ったときは未知の方を選ぶというチャレンジ的精神で旅行でも散歩でも人間でもパブでもやって来たつもりであるが、近頃は体力の限界をも感じるようになってきた。どこまでやれるかわからないが、しばらくは同じ北関東平野の一隅にあって、筑波の学生諸君とも今後さらに勉強をつづけて行きたいと思う。先生方にはさらにごめんどろをかかけますが、なにとぞよろしくお願い申しあげます。

(91・12・25)